

■広島派遣報告



▲平和の集いに出演した令和6年度派遣中学生と我孫子中学校演劇部

令和6年12月1日(日)、けやきプラザふれあいホールにて「平和の集い～我孫子から平和を願う～」を開催しました。派遣中学生たちは、広島で学んだことや感じたことを、スライドを交えながら報告しました。

本書では派遣中学生による報告を一部抜粋してご紹介します。

助けてあげられなくて
ごめん・・・。

助けてあげられなくてごめん・・・。

敵機がやってきた
自分は心がまえはできていた

衝撃でした。
なぜ? どうして? 心が苦しくなりました。
そして、自分でもよくわからない感情が
こみ上げてきました。

敵機がやってきた

自分は心がまえは
できていた



その時は突然やってきました。
1945年、昭和20年8月6日、月曜日。
午前8時15分、一発の原子爆弾が広島に投下
されました。

原子爆弾は地上から約600mのところで爆発しました。一瞬にして街は破壊され、何が起こったのかもわからないまま、多くの人々の命が、奪われました。

生き残った人々も、やけどでパンパンに膨れ上がった顔、だらりと垂れ下がった皮膚、血まみれの体、変わり果てた姿で炎の中を逃げ惑いました。





私たちは、このような悲劇が二度と繰り返されないよう、戦争や核兵器の恐ろしさを知り、平和の尊さを学ぶために被爆地となった広島へ向かいました。

我孫子市平和事業

広島 **15**回 長崎 **4**回

派遣中学生 **189**名



これまでに我孫子市では、広島に15回、長崎に4回、中学生を派遣してきました。

戦後60年の2005年、平成17年から始まった事業です。

のべ189名の中学生が我孫子市平和事業の一環として、派遣されてきました。

事前説明会 事前勉強会等

私たちは今年の7月24日、我孫子市内6つの中学校から最大3人ずつ、代表として広島への派遣説明会に参加しました。

令和6年度 中学生派遣事業 事前説明会・事前学習会等

日時 : 令和6年7月22日(月) 午後1時30分から4時30分
場所 : 我孫子市役所 分館大公会議室

13時30分から14時15分【事前説明会】

派遣者及び引率者顔合わせ、行程の説明、注意事項など

14時15分から15時15分【市長・教育長との懇談】

市長・教育長との懇談、写真撮影

15時20分から16時00分【事前学習会】

先輩派遣中学生からのお話・質疑

- ・令和3年度派遣中学生(広島) 城野 来海 さん
- ・令和4年度派遣中学生(広島) 田中 千尋 さん
- ・令和4年度派遣中学生(広島) 菅 光祐 さん

我孫子市平和事業推進市民会議委員の方からのお話・質疑

- ・我孫子市平和事業推進市民会議委員 山田 典子 さん

16時00分から16時30分【その他】

団長・副団長の決定、活動グループ分け、部屋割り

説明会では、平和市民会議の桑原俊晴会長や、原爆被爆2世の山田典子さんから貴重なお話を伺い、原爆とはどのようなものなのか、また、自分たちがこれから派遣される目的などについて考えました。



被爆2世だということを周りの人に最初に話したときは、勇気が必要だったという山田さんの話を伺い、平和事業への取り組みの重要さに気がつきました。

また、胎内被爆された的山ケイ子さんと一緒に広島へ行くことを知り、気持ちが引き締まる思いがしました。

過去に派遣事業に参加された先輩方からも話を聞きました。自分の派遣の経験をもとにしたアドバイスや、どんなことに注目して派遣に行ってほしいか、また、どんなことを感じてきてほしいかなど、たくさんのことを教えていただきました。



先輩方から、行ってみて初めてわかることがたくさんあることや、派遣から時間がたった今も活動していることの原因などを伺えたことで、「次は、自分が派遣団の一員なんだ」という自覚が少しできました。



星野順一郎市長、丸智彦教育長からも、お話を伺いました。

星野市長からは、「知識は後からでいい。現地で感じる事が大切だ。」という言葉をお伺いしました。

その言葉を受け、知識ばかりを詰め込んだ、頭でっかちな学びではなく、広島でしか見られないもの、広島でしか聞けないこと、広島でしか感じられない思いを大切に、学ぼうと思いました。



星野市長や丸教育長、そして一緒に行く仲間へ、自分の思いを言葉にして伝える時間もありました。

「戦争の恐ろしさ、平和の尊さについて考えたい。」
「学んできたことを派遣団として多くの人に伝えたい。」
「人に伝えることで学びを深めたい。」



「広島へ行き、学ぶ」ということが、まだぼんやりとしている部分もありましたが、一人一人の言葉を聞き、同じ目的を持っている仲間がいることを心強く感じました。そして、多くの人に「広島で学んだことを伝える」という、使命感を持ちました。



私たち派遣団は、説明会を経て多くのことを知り、派遣までの間、広島に投下された原子爆弾や当時の状況について調べ、出発の日を待ち望んで過ごしました。

最初は、この仲間と仲良くなれるのかと不安もありましたが、派遣の日が近づくにつれ、早くその日が来ないかと待ち遠しくなりました。

1日目



いよいよ、広島に向けて出発です。
無事に16人全員が参加できました。
私たちにとって、本当に大切な時間になるよう、それぞれがしっかり思いをもって
出発しました。



原爆ドームは元々、「広島県産業奨励館」という建物でした。しかし、原子爆弾が投下されたことで、一瞬で壊されてしまいました。たった3メートルの爆弾がこの大きな建物を一瞬にして破壊してしまうなんて、とても考えられませんでした。

見たことのない角度から原爆ドームを見ることで、原子爆弾の威力がどれほど恐ろしいものだったのか、具体的な数値を見るより実感が湧きました。焼け焦げた跡、溶けてしまった鉄骨やコンクリート、崩れた外壁、何もない建物の内部。残された部分と破壊された部分の境目が溶けている様子を見て、これが爆風ではなく、熱線によるものであることがわかりました。その痕跡が恐ろしく、目を疑いました。

原爆ドームは、爆風がほぼ真上から垂直にあたったため、奇跡的に建物の骨格が残ったそうです。そのため、現在も原爆の悲惨さを伝えるため、当時のままの姿で遺されています。世界遺産にも登録され、人類が決してあの日を忘れてはならないという意味を含め、負の遺産となっています。

被爆体験講話



私たちは、被爆体験証言者である、佐渡郁子さんから被爆体験のお話を伺いました。

現在87歳の佐渡さんは、被爆体験証言者として、私たちのような原爆を知らない世代に当時の様子を証言してくださっています。

講話では、被爆の瞬間と被爆直後の様子を聞くことができました。

佐渡さんは当時7歳で、2歳の妹さんと一緒に、おばあさんの家の庭で、遊んでいたときに被爆されました。

佐渡さんは原爆について、目を開けていられないほどのまぶしい光、そして大きな音だった。と語ってくれました。被爆地から870m離れた場所で、「ピカッ」「ドーン」となった瞬間、2人は吹き飛ばされ佐渡さんは意識を失ってしまったそうです。

意識を取り戻した佐渡さんは、全身火傷に覆われた妹さんを見つけ、看病をしたそうです。火傷部分には次第にウジがわき、わいたウジをとってあげていた、という話を聞きました。

そんな受け入れがたい現実から、まだ79年しか経っていない、という事実にも恐ろしくなりました。原爆は3000度～5000度と、体の中まで焼けるような熱さでした。のどが渇き、水を求めましたが、「水を飲むな！」と兵隊に止められ、佐渡さんは水が飲めませんでした。玄関の横に防火水槽がありましたが、放射線に汚染され、安心して飲める水はありませんでした。川の水を求めた人々も次々と亡くなり、川は死体で埋まっていきました。そんな中、佐渡さんは、草の汁を飲んで、命を繋いだと教えてくれました。

佐渡さんは、当時の恐怖や悲しみの深さを伝えてくれました。「二度と同じ過ちを繰り返さないために、戦争や核兵器、原爆の恐ろしさを次の世代につたえてほしい」という佐渡さんの言葉に、責任の重さを感じました。

世界では、今も核兵器を保有している国があります。主要な国だけでも、合わせて約12,000もの核弾頭が確認されているそうです。核兵器を脅しに使い、実際に使おうとしている現状が普通になっていく世界は絶対にいけない、と感じました。

唯一の被爆国である日本には、核兵器の恐ろしさを、想像もできないほどの悲惨さを、伝え続けていく使命があると思いました。

2日目



2日目は朝から平和記念式典に参加しました。式典には、世界中からたくさんの方が参列していました。前方の席には、多くの遺族の方や色々な国の代表の方が参列しているのが見えました。

式典が始まると、広島市議会議長の式辞、広島市長の平和宣言、

平和への誓いなどを聞きました。一つ一つの言葉から「平和」ということについて思いを馳せました。

その中で最も印象に残ったのは、こども代表の「平和への誓い」です。戦争を知らない私より、もっと幼い小学生が言葉を紡いでくれました。当時の様子をいまだに語ることでできない被爆者の思いや、79年経った今でも、苦しみ続けている姿を、側を感じているからこそその言葉だと思いました。

広島では、このように戦争について、そして平和について思いを繋いでいるのだと感じました。平和宣言や小学生の平和への誓いを聴き、自分達が中心になって世界恒久平和と核兵器廃絶を実現しなければならないという強い意志を感じました。

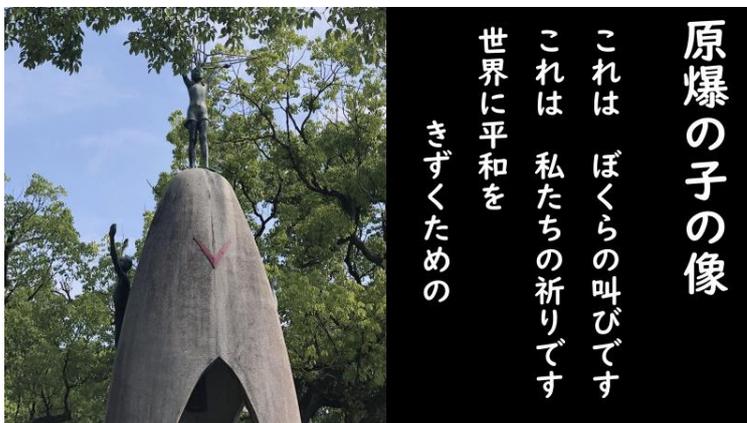
原爆の子の像は1985年（昭和60年）5月5日に建てられました。

「禎子さんを始め、原爆で亡くなった方の霊を慰める石碑を創ろう」と禎子さんの同級生に提案があり、建てられました。

禎子さんの同級生の方々は、わずか小学6年生で被爆という

壮絶な体験をし、さらに大切な友達を失ってしまいました。しかし、「原爆でなくなったすべての子どものために」という思いで、慰霊碑をつくる活動に中学時代を費やし、原爆の像がつけられました。さまざまな困難を乗り越え、本当に強い。と思いました。

石碑の上には女の子が両手を広げ、平和の象徴である鶴を掲げています。像の下の石碑には「これはぼくらの叫びです これは私たちの祈りです 世界に平和を築くための」と刻まれています。この像には「明るい希望」という意味がこめられています。





広島では、原爆により、約2万2千人もの子供が亡くなっています。

平和記念公園内にある原爆の子の像には、子どもたちの尊い命を無駄にしないという願いが込められています。

全国からたくさんの千羽鶴が奉納されていて、千羽鶴の一

羽それぞれに一人ひとりの平和への強い思いが込められていると思うと、千羽鶴を奉納するということの責任の重さを感じました。また、たくさんの千羽鶴が奉納されているのを見て、恒久平和を多くの人々が願っていることが感じられました。

私たちも我孫子のみなさんのたくさんの願いが込められた千羽鶴を奉納させていただきました。

「子どもたちの誰もが、小さな願いでいいから叶う世界になってほしい」と、思いを込めました。

2日目と3日目に平和記念資料館を訪れました。

時間をかけ、自分の知りたいことについて調べ、学ぶ時間でした。展示物や写真、被爆者が描いた絵画の数々を見ることができました。

ここで、私たちは戦争の現実を知ることになりました。



直視できない程の、現実味を帯びた数々の展示品に、思わず目を瞑ってしまうほどでした。

胸が苦しくなりました。

静かで穏やかなはずの展示室で、身体に痛みが走るような感覚と耐えきれなくなるほどの涙が溢れそうになりました。

「残酷」とは、「痛々しい現実」とは、このことなのかと膝から崩れ落ちそうになりました。

3日目

多聞院



3日目は、まず多聞院を訪れました。

多聞院にある鐘楼は、爆心地から最も近い木造建築として永久保存することを認定されています。

この鐘には、平和への願いを込めて「NO MORE HIROSHIMAS」と刻まれています。また、人々が、広島は被爆の地であり、たくさんの命が奪われた過去があることを忘れないために、住職さんが毎朝原爆が投下された8時15分に鐘をついています。

私たちも、一人一人の平和への願いを込めて、今を平和に生きられていることのうれしさを噛みしめて鐘をついてきました。

鐘をつくると、当時の広島の悲惨な情景が浮かび、この過ちをもう繰り返してはいけないと強く思いました。

本川小学校



爆心地から約410mの距離で被爆した本川小学校の平和資料館を訪れました。

原爆が落とされる前、ここにも今の私たちと変わらず、学校で学んでいる子どもたちがいました。

しかし、突然の原爆投下により、一瞬のうちに約400人の児童と10人の教職員が被爆し、亡くなりました。

原爆が投下された8時15分を指したまま止まっている婦人時計を見ました。

この空間の時間が止まっているように感じました。

被爆した校舎の歴史を記した年表に注目すると、学校の授業が昭和21年(1946年)2月23日に再開されていました。原爆が投下されてから半年ほどで学校が再開されていたのです。

多くの被害を受けながらも、学びをあきらめないところに、当時の人々の「生きていこうとする心の強さ」を感じました。

当時生き残ったのは、たった2人だったという話を聞きました。ガラスや瓶が溶けたもの、校舎のなかの壁が焼けはがれている様子も見ました。

たった2人しか生き残れなかったという話を聞いて、人生はいつ何が起こるかわからないと感じました。だからこそ自分や家族、友人、周りにある環境に感謝しながら、大切に過ごしていきたいと強く思いました。

今も被爆当時をそのままのかたちで残す本川小学校は、79年前の出来事を必死に私たちに伝えようとしていると感じました。



3日間とは思えない、内容が充実した広島派遣でした。

この3日間で原爆についての知識だけでなく、戦争の恐ろしさや残酷さ、また被爆者の生きる強さ、後世に伝えようとする意志など、現地でしかわからないことをたくさん得ることができました。

これらの派遣を通して、行く前よりも一回り成長した気がしました。

我孫子市平和祈念式典

私達は広島派遣の2日後、8月10日にアビスタで行われた我孫子市平和祈念式典に参加しました。多くの方が参列していることに驚きました。

現在の世界情勢に目を向ければ、ロシア・ウクライナ・イスラエルやパレスチナなど、戦争のニュースは絶えません。



平和への関心が高まっているということは、世界は平和ではないからだと感じています。

我孫子市平和祈念式典は、戦没者及び原爆犠牲者に哀悼の意をささげるとともに、核兵器の廃絶と平和を祈念し、毎年実施しています。

我孫子市の平和都市宣言を読み上げ、今一度平和の実現に向けた気持ちを参列者で一つにしました。

平和都市宣言には、世界の恒久平和についての願いや、我孫子市の核兵器廃絶に対する思いがこぼれていました。

平和都市宣言を読み終えた後には、私たちの学校の生徒みんなで作り上げた千羽鶴を奉納しました。



式典終了後、「平和の記念碑」に献花をしました。
記念碑の側にある「平和の灯」を見て、広島と我孫子市、場所は離れていても平和への思いは一つだということを実感しました。



午後からは、元派遣中学生の先輩方が我孫子市平和事業推進市民会議主催の「とうろうに平和の願いを込めて」において、リレー講座特別版を行ってくれました。

リレー講座を通して、平和な世界にするために自分達にできることを考えました。

我孫子市民の方も参加してくださり、小さな子どもから大人ま

で、みんなで平和について語りました。

性別や年齢が違って、平和への思いは一つだということを感じました。

リレー講座が終わった後は、みんなで灯籠を製作しました。灯籠には、リレー講座を通して学んだことや、考えたことを基に平和な世界にするために自分たちができることを書きました。



完成した灯籠に灯りをともし、平和への思いを込めて流しました。





我孫子中学校 柏田 健 さん
「毎日を大切に、
価値のある日々を過ごす」



我孫子中学校 日高 颯 さん
「みんなの未来が
明るくなりますように」



我孫子中学校 見城 さくら さん
「たくさんの人に戦争の
ことや平和について伝え、
知ってもらい考えてもらう」



湖北中学校 永野 ちとせ さん
「あたり前を大切に」

湖北中学校 藤本 道大 さん
「平和になるためにあたり前
のことに感謝する」

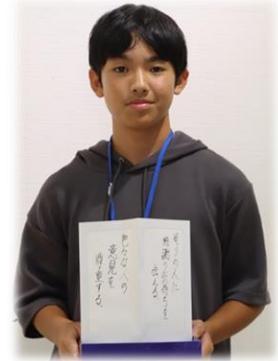


湖北中学校 伊藤 きなり さん
「どんなに偉くなっても人を
思う気持ちをかえず、自分の
ことしか考えられない人になら
ないようにする」



布佐中学校 片岡 祭 さん
「あたり前にあるこの平和が
なくなれませんように」

布佐中学校 吉田 航汰 さん
「まわりの人に感謝の
気持ちを伝える」



湖北台中学校 岡本 健一郎 さん
「今を大切にして
過ごせるようにする」

湖北台中学校 神野 泰智 さん
「当たり前が一番大事」



湖北台中学校 富越 菜々子 さん
「あたり前のことに感謝する。
今の生活を大切にする。」



久寺家中学校 大庭 直翔 さん
 「幸せを繋ぐ
 平和な世界」

久寺家中学校 宮本 陽音 さん
 「戦争は二度と
 起こさない！！」



白山中学校 島 衣伶奈 さん
 「お互いのちがいを認めあう」

白山中学校 伊藤 明日香 さん
 「みんなが自分なりの
 幸せを見つけて
 平和に過ごせますように」



白山中学校 細川 星姫 さん
 「みんな違って
 みんないい」

広島・長崎派遣中学生リレー講座「未来を生きる子どもたちへ」

我孫子市では、元派遣中学生たちで、小学校6年生に平和について考える授業をしています。

それがリレー講座です。自分たちの経験を、次につなぐことを目的として、リレー講座と名付けられました。

最初は、どうすればよいのか不安もありましたが、先輩方に助けられながら、初めて授業をアシストする立場で、リレー講座に参加しました。



リレー講座に関わってみて、小学生が平和について色々な意見を持っていて、私たちは次のことに気付きました。

私たちの考える平和
平和に形はない
だから
平和への学びは終わらない
私たちは平和について
考え続けなければならない
誓いを胸に



子どもたちがあげてくれた意見には、「今ある自分が平和だなと感じることを大切にしたい」、「命や明日はどれだけのお金があっても買えない」、「この授業をきっかけに平和のことや戦争の恐ろしさがわかった」などあり、少し自分たちの役割が果たせたことにうれしさを感じました。



さらにリレー講座に参加して、講師を務められるようになったら、わたしたちが中心になり、自分たちの言葉で、小学生に平和を伝えていきたいです。

